

薪文楽

TAKIGIBUNRAKU

かがり火に浮かぶ、伝統の舞台

10月3日、大川阿蘇神社の農村舞台で「第三十二回薪文楽」が開催され、約１９０人が来場しました。

当日は「寿式三番叟（ことぶきさんばそう）」や「傾城阿波の鳴門（けいせいあわのなると）」などの演目が披露されました。また、清和中学校の生徒による清和文楽所作踊りも行われ、来場者が伝統芸能に触れる機会となりました。

中入りを挟んで上演された「絵本太功記（えほんたいこうき）」は、武智光秀（明智光秀）が尾田春長（織田信長）を討った本能寺の変を題材にした物語です。現在放送中のＮＨＫ大河ドラマ「豊臣兄弟！」でも描かれる戦国時代を背景とした演目で、歴史に思いをはせながら楽しめる舞台となりました。

終演後には、来場者が人形や出演者と触れ合う時間も設けられ、伝統芸能を身近に感じられるひとときとなりました。



農村に根付いた、人形芝居の歴史

清和文楽の始まりは、江戸時代の嘉永年間。浄瑠璃を好む農家の人たちが、阿波・淡路から訪れた旅の一座から人形を買い受け、操り方を習ったことがきっかけとされています。

豊作を祈願する芝居として上演され、農作業の合間の楽しみとして地域の人たちに親しまれてきました。当時は、各家庭で作った重箱弁当を持ち寄り、食事やお酒を楽しみながら芝居を観覧していたといいます。

昭和三十年ごろまで農村舞台で奉納されていましたが、時代の移り変わりとともに途絶えていました。その後、かつての農村舞台で芝居を楽しんでいた光景を再現しようと、平成五年から「薪文楽」が開催されています。



人形遣いが生み出す、繊細な表情

清和文楽の人形芝居は、３人の人形遣いが息を合わせて一体の人形を操ります。人形の首（かしら）と右手を操る「主遣い」、両足を操る「足遣い」、左手を操る「左遣い」が、それぞれの役割を担います。

見どころの一つは、細やかな動きで表現される人形の感情です。視線と指先の向きを合わせ、頭を小刻みに震わせたり、顔を動かして涙を拭うしぐさを表したりと、繊細な技術によって喜びや悲しみが伝えられます。

人形でありながら、まるで心が宿っているかのような動き。その一つ一つに、人形遣いの技と工夫が込められています。













地域で育み、次の世代へつなぐ

清和文楽は、舞台の上だけで受け継がれているものではありません。地域の子どもたちも幼いころから清和文楽に触れ、小学四年生では文楽クラブ、六年生では太夫や三味線や人形遣い等、清和文楽について学ぶ機会があります。中学生になると、小学生に清和文楽を教えるなど、年齢を超えた関わりの中で伝統が受け継がれています。

昭和五十四年には熊本県の重要無形文化財に指定され、平成四年には人形浄瑠璃専用の劇場「清和文楽館」が建設されました。現在も年間約２００回の公演が行われ、地域に根差した伝統芸能として親しまれています。

かがり火に照らされた農村舞台で披露される人形芝居。その背景には、長い年月をかけて地域の人たちが守り、育んできた文化があります。薪文楽は、地域の歴史と伝統を次の世代へとつなぐ大切な機会となっています。

